

保育者としての資質と保育実践能力に対する 学生の意識について

林 悠子・森本 美佐・東村 知子・高橋 千香子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Student Awareness of Abilities and Qualities of Child Care Training

Yuko Hayashi・Misa Morimoto・Tomoko Higashimura・Chikako Takahashi

Naragakuen University Narabunka Women's College

これまで、保育現場が保育者養成に求める保育者としての資質や専門的実践能力について分析してきたが、本研究では、本学学生が保育者としての資質や能力についてどのように考え、どの程度それらの力を身につけていると考えているのかを明らかにするために意識調査を行った。保育者としての専門能力も資質も、それを重視するか否かという自身の考えについてはほとんどの項目で1回生の方が高かった。いま自分がどれくらい実践できるか（身につけているか）という自己評価について、保育者としての実践的専門能力は1回生の方が高く、保育者の資質は2・3回生の方が高かった。1回生はまだ理想の保育という意識が高く、漠然とした自信もあるが、2・3回生については学習や実習を重ねる中で子どもに対する意識や責任感が備わってきた一方で、現実の自分について冷静な評価をしていることが示唆された。

キーワード：保育者養成、保育者としての資質、保育者としての専門的実践能力、養成校学生の意識

1. はじめに

保育を取り巻く環境が変化する中、保育者養成機関もいかに質の高い保育者を養成するかが強く求められる時代になっている。単に教育して世に送り出すだけでなく、世に出した卒業生が現場で活躍し、仕事を続け、子ども達だけではなく先輩として後輩達も育てていけるよう、保育はもとよりキャリアに対しても高い意識を持った学生を育てることが急務とされている。

短期大学である本学における保育者養成の在り方を再検討するため、筆者らはこれまで3年にわたり調査を実施してきた。まず、これまでの本学卒業生の就職先が保育者養成校に対して一般的に何を求めているのか、また就職した本学卒業生はどのような点が評価されているのかについて分析したところ、保育現場では保育者としての技術や知識だけではなく、資質や社会人としての力、保育者として働くこと

いう強い意識が求められること、本学卒業生については、個人の資質や人柄、働く姿勢については評価されているものの、「保育技術」は十分ではないことを明らかにした¹⁾。次に、新人保育者の早期離職に関して実態調査を行ったところ、早期離職の根本的な原因は人間関係にあるが、「卒業時と現場で求められる実践能力のギャップ」の存在も示され²⁾、卒業時にどのような実践能力を備えているべきかを検討する必要に迫られた。そこで、「現場で求められる能力と新入職者が有している能力とのギャップ」について、教育課程による差を分析したところ、短期大学卒業者と四年制大学卒業者では入職時の専門的実践能力の全項目で四年制大学卒業者のほうが高得点を示し、特に技術の応用や展開力などで差がみられ、養成期間の短い短期大学においていかに保育者としての資質や実践能力を身につけていくかが課題であることが示された³⁾。以上のことから、現場で必要とされる資質や実践能力についてはある程度明らかになったが、そうした資質や実践能力に対する学生の意識についても検討する必要があると考えられた。そこで、本研究では、学生が現場で求められる保育者としての資質や専門的実践能力についてどのように考え、自身がそれらを現時点でどのくらい身につけていると感じているのか、本学学生の意識について明らかにする。

2. 目的

本学学生が保育現場で必要とされる資質や専門的実践能力をどれくらい重視しているのか、また、いまの自分はそれらをどのくらい身につけていると考えているのか、学生の意識を明らかにし、学習や実習を重ねていくことでどのような変化が生じるのかを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

3.1 調査時期

アンケート調査の実施期間は2014年7月、2015年5月であった。

3.2 調査内容

文部科学省委託事業「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」成果報告書⁴⁾で提示された項目をベースに、『保育者としての専門的実践能力』20項目、『保育者としての資質』20項目を作成した。それぞれ「たいへん重視する(5) — 重視しない(1)」として自身の考えを、また『保育者としての専門的実践能力』については「一人で実践できる(5) — 指導されても実践できない(1)」、『保育者としての資質』については「たいへん身につけている(5) — 身につけていない(1)」として、いまの自分についての回答を得た。

3.3 調査対象と回答の属性

クラス単位で、無記名によるアンケート調査を実施した。1回生99名、2・3回生100名から回答が得られたが、記入漏れや不明確な回答等の不備9名（1回生7名、2回生2名）をのぞいたため、分析対象とした回答者は1回生92名、2・3回生98名の計190名（ 19.4 ± 1.5 歳）であった。なお、3回生とは、本学の長期履修学習制度で学ぶ3年次学生のことである（58名）。

3.4 分析の方法

各項目に対する5段階尺度による回答について学年別に集計をし、順位和検定（以下U検定）により比較を行った。統計処理にはIBM SPSS Statistics 21を使用した。

3.5 倫理的配慮

調査の趣旨や、回答は自由であること、無記名によるプライバシーの確保を口頭ならびに調査用紙の冒頭に文章で説明して調査への協力を依頼し、回収を持って同意を得たものとした。

4. 結果

4.1 保育者としての専門的実践能力

図1は、保育の専門的実践能力をどのくらい重視するかについて、回答者の平均値を学年別に表したものである。重視しているものとして、「保護者への対応力」や「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」、「絵本の読み聞かせなどの豊かな表現力」、「子どもの特性や個性にあわせた保育展開能力」などのポイントが両学年とも高くなっていた。「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」のみ2・3回生のポイントが高かったが、その他すべての項目で1回生のポイントが高く、「運動能力」($p=.012$)、「指導案などの立案能力」($p=.011$)では5%水準で、「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」($p=.002$)、「絵画造形能力」($p=.005$)では1%水準で有意な差が認められた。

図2は、保育の専門的実践能力をいまの自分がどの程度実践できるかについて、回答者の平均値を学年別に表したものである。実践力が身につけているものとして、「運動遊びを展開する能力」、「絵画造形能力」、「絵本の読み聞かせなどの豊かな表現力」、「自然とふれあう力や敏感さ」などのポイントが両学年とも高くなっていた。「絵本の読み聞かせなどの豊かな表現力」のみ2・3回生のポイントが高かったが、その他すべての項目で1回生のポイントが高く、「ピアノ技術」($p=.016$)、「子どもの特性や個性にあわせた保育展開能力」($p=.030$)、「特別支援を要する子どもへの保育や障害児保育に関する技術」($p=.041$)では5%水準で、「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」($p=.009$)、「保護者への対応力」($p=.002$)、「研究や情報処理能力」($p=.002$)では1%水準で有意な差が認められた。

これらのことから、学生らが重視する保育者としての専門的実践能力には同じ傾向がみられるが、1回生のほうが2・3回生に比べて専門的実践能力を重視するとともに、それらを実践できると自信を持っていることがうかがわれた。

4.2 保育者としての資質

図3は、保育者としての資質をどのくらい重視するかについて、回答者の平均値を学年別に表したものである。重視しているものとして、「子どもに対する思いやりのある心」、「子どもに対する信頼と責任感」、「人との約束を守る力」などのポイントが両学年とも高くなっていった。「社会人としての自覚を持って仕事に臨む力」のみ2・3回生のポイントが高かったが、その他すべての項目で同じ、もしくは1回生のポイントの方が高く、「基礎学力や一般常識」($p=.003$)のみ1%水準で有意な差が認められた。

図4は、保育者としての資質をいまの自分はどの程度身につけているかについて、回答者の平均値を学年別に表したものである。身につけているものとして、「子どもに対する思いやりのある心」、「子どもに対する信頼と責任感」、「人との約束を守る力」などのポイントが両学年とも高くなっていった。ほとんどの項目で2・3回生が1回生よりもポイントが高かったが、「子どもに対する信頼と責任感」($p=.011$)、「物事に進んで取り組む力」($p=.013$)では5%水準で、「子どもに対する思いやりのある心」($p=.003$)、「社会人としての自覚を持って仕事に臨む力」($p=.009$)では1%水準で有意な差が認められた。

これらのことから、学生が重視する保育者としての資質には同じ傾向がみられるが、専門的実践能力とは逆に、2・3回生のほうが1回生に比べてそれらの資質を身につけていると自信を持っていることがうかがわれた。

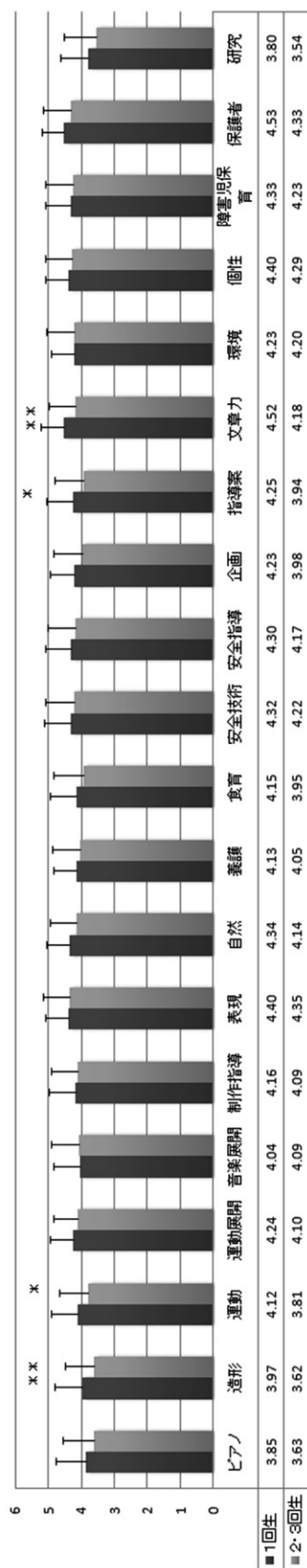


図1 保育者の専門的実践能力についてどれくらい重視するか。 1 年生：N = 92, 2・3 年生：N = 98 (* p < .05, ** p < .01)

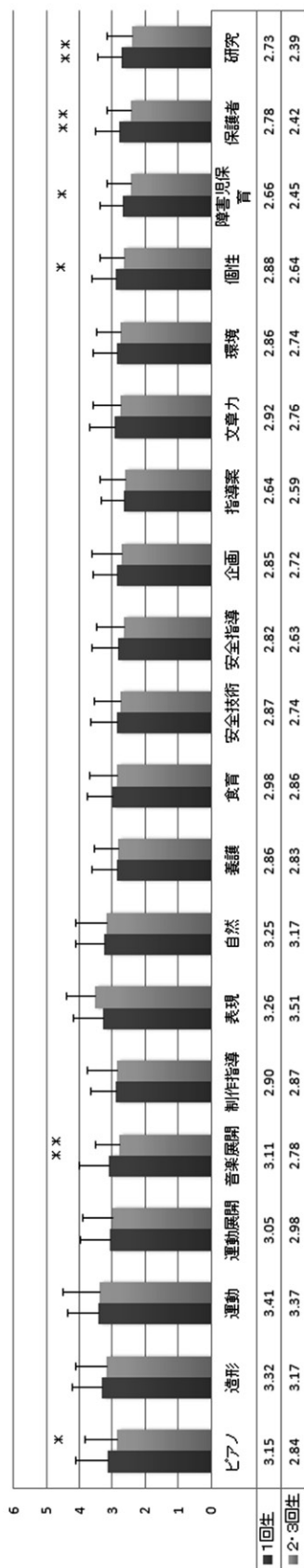


図2 保育者の専門的実践能力についてどれくらい実践できると思つか。 1 年生：N = 92, 2・3 年生：N = 98 (* p < .05, ** p < .01)

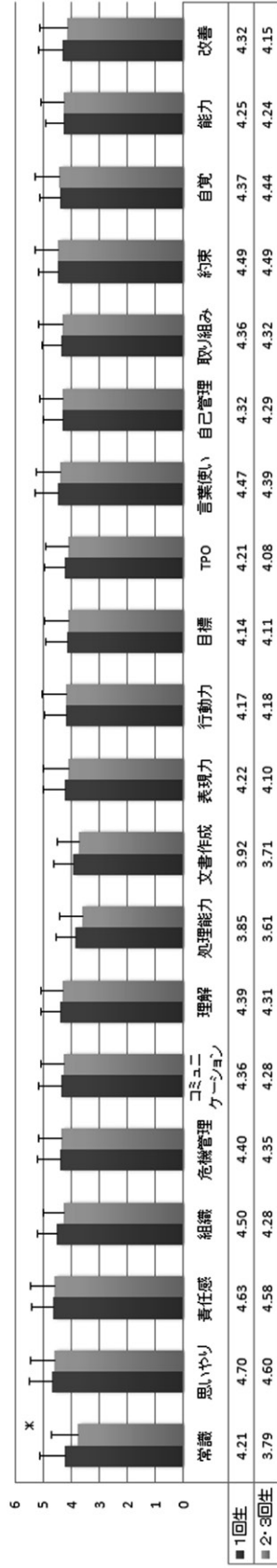


図3 保育者としての資質についてどれくらい重視するか。 1回生：N=92, 2・3回生：N=98 (*p<.05, **p<.01)

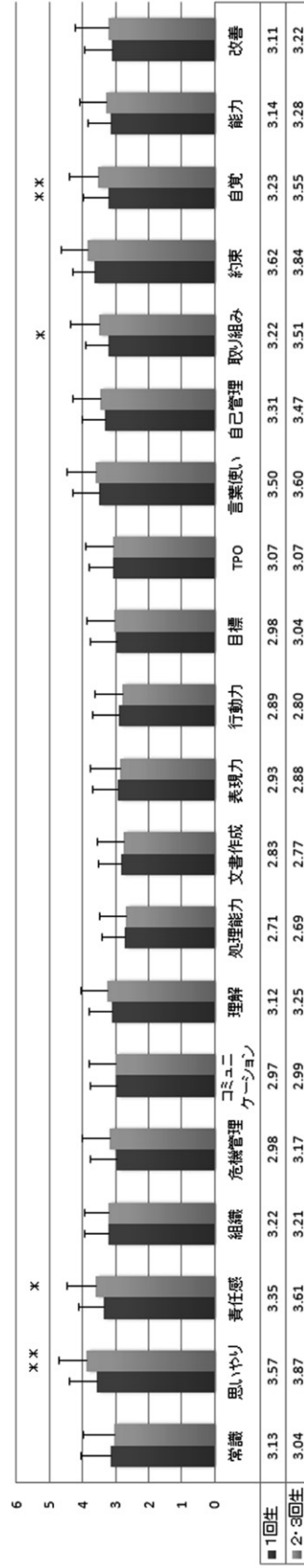


図4 保育者の資質についてどれくらい身につけているか。 1回生：N=92, 2・3回生：N=98 (*p<.05, **p<.01)

5. 考 察

本研究では、学生らが保育現場で求められる保育者としての資質や専門的実践能力についてどのように考えており、そして自身はどのくらいそれらを実践できる、もしくは身につけていると感じているのか、本学学生の意識についてアンケート調査により分析を試みた。

保育者としての専門的実践能力をどのくらい重視するかについては、「保護者への対応力」、「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」、「絵本の読み聞かせなどの豊かな表現力」、「子どもの特性や個性にあわせた保育展開能力」などのポイントが共通して高かった。ほぼすべての項目で2・3回生よりも1回生のポイントが高く、「絵画造形能力」「運動能力」「指導案などの立案能力」「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」では学年間に差が認められた。どの程度実践できるかについては、「運動遊びを展開する能力」、「絵画造形能力」、「絵本の読み聞かせなどの豊かな表現力」、「自然とふれあう力や敏感さ」などのポイントが共通して高かった。重視するかと同様に、ほぼすべての項目で1回生のポイントが高く、「ピアノ技術」、「子どもの特性や個性にあわせた保育展開能力」、「特別支援を要する子どもへの保育や障害児保育に関する技術」「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」、「保護者への対応力」、「研究や情報処理能力」では学年間に有意な差が認められた。保育者としての資質をどのくらい重視するかについては、「子どもに対する思いやりのある心」、「子どもに対する信頼と責任感」、「人との約束を守る力」などのポイントが共通して高かった。ほぼすべての項目で同じ、もしくは1回生のポイントの方がやや高かったが、「基礎学力や一般常識」のみ学年間に有意な差が認められた。どの程度身につけているかについては、「子どもに対する思いやりのある心」、「子どもに対する信頼と責任感」、「人との約束を守る力」などのポイントが共通して高かったが、ほとんどの項目で2・3回生が1回生よりもポイントが高く、「子どもに対する信頼と責任感」、「物事に進んで取り組む力」、「子どもに対する思いやりのある心」、「社会人としての自覚を持って仕事に臨む力」では学年間に有意な差が認められた。

これらの結果から、保育の専門的実践能力としては、学年を問わず、造形や運動といった技術・技能面よりも、保護者対応や個性にあわせた保育展開能力といった経験や応用力が求められるものの方が重視されていることがうかがえる。しかし、1回生と2・3回生とでは、絵画の造形や運動能力、表現力で差がみられ、より1回生のポイントが高かった。1回生は専門的実践能力全般を重視しており、特に技術・技能面に重きを置いているようである。このことは、1回生の学習の中では知識重視の教科書を用いる講義よりも、ものを造ったり体を動かしたりする演習の方が印象に残り、また、作品の上手下手や知っている手遊びの数などがわかりやすく保育の実践能力と捉えられていることが推測される。奥山ら⁵⁾も、保育の技能的側面に対する学生の関心の高さや実技的内容への要望の高さを指摘している。一方で、それらをどれくらい実践できるかという点、運動や造形、豊かな表現力、自然とのふれあい等の技術・技能面の能力については評価が高いが、障害児保育や保護者対応、研究能力等の講義型の知識に裏付けられたスキルや応用力については評価が低かった。さらに、2・3回生の方が、1回生よりも実践力を低く評価していた。学年間の違いは、学習内容の違いも大きいですが、実習経験の有無が大きいと考えられる。2・3回生では、ほとんどの学生が保育所実習をすべて終え、施設実習を経験している者もあり、最後の幼稚園実習を控えた時期であったため、まだ実習経験のない1回生に比べて格段の保育

現場経験がある。このことにより、技術や技能そのものよりもそれらを複合的に展開したり応用する力を重視しており、また様々な学びを経験したことで自身の能力について疑問を持ち、1回生に比べて低い自己評価になったと推測される。これについて、中村⁶⁾は、実習経験は保育学生の保育者効力感を高めるという有意な効果は見出せなかったものの、実習経験が保育者効力感を上限もなくただ高めるのではなく、より現実に即した実現可能な範囲内の保育者効力感に近づけていくのではないかと推測している。そして、1年生の効力感の高さについても触れ、「入学直後の保育者になる強い期待感」が反映されたもので、経験に基づいて獲得されたのではない‘夢見る保育者効力感’であるとしている。また、谷川⁷⁾は幼稚園実習において体験するリアリティショックが保育に関する認識を変容させることを指摘しており、浜崎ら⁸⁾は実習中に成功場面を多く経験する場合には効力感が高まり、失敗経験が多い場合には効力感は低下するのではないかと述べている。本研究では無記名のアンケートであったため、回答者である2・3回生が実習において実際にどのような経験をしてきたのかはわからないが、実習における様々な体験や人との関わりを通して、個々の意識が変容したことは明らかであり、それが学年間の意識の差を生み出したと推測される。2・3回生の自己評価の低さは、懸念すべきものというよりむしろ、現実が見えてきた、より冷静な自己評価であると考えられる。

保育者としての資質については、「基礎学力や一般常識」では学年間に差がみられたものの、学生らが重視する資質には同じ傾向がみられ、「子どもに対する」姿勢や心持ちと同様に、約束を守ることや自覚を持つことなどの「社会人として」望まれる態度も重視されていることがうかがわれた。さらに、専門的実践能力とは逆に、2・3回生のほうが1回生に比べてそれらの資質を身につけていると自信を持っていることがうかがわれた。中村⁹⁾は、学生は保育者の資質をまず笑顔や優しさ、愛情といった感覚的・抽象的なイメージで捉えており、それらの保育者として必要な人格的資質は備わっているが、専門的実践能力や技術については不十分だと自己評価していると指摘し、学年間では、責任感や信頼、厳しさといった資質が2年生で高いことも明らかにしている。本学学生においても、子どもに対する信頼や責任感、思いやりだけでなく、物事に進んで取り組む力や「社会人として」自覚を持って仕事に臨む力で学年間に差がみられた。ここでも実習経験やそれを踏まえた進路選択を迫られていることなどがこの意識の差の要因であると推測される。

つまり、専門的実践能力も資質も、同じように重視しながらも、1回生ではまだそれらの能力を漠然と捉えているためにより自己の能力も高く評価しているのに対して、2・3回生ではそれらが現場経験を通してよりリアルなものになり、できるできないや大事かそうでないかを冷静に評価しているようである。さらに、専門的実践能力については自己評価が低く、保育者としての資質のほうが評価が高くなっている。このことに関しては、単に自己評価にとどまらず、筆者らの行った現場へのアンケート調査¹⁾でも、本学卒業生について、人間性や保育者としての資質についての評価に比べて専門技術の低さについて指摘があった。保育者としての資質を大事にしながら、専門的実践能力を育てていくことの必要性が強く感じられる。後藤¹⁰⁾は、実習とは、子どもと直接または間接的に関わる中で、独立して習得してきたことを実践と関連させながら統合した形で学び、保育士らと関わる中で、保育技術を土台にして多角的に子どもを捉えて保育を総合的に構成した援助を学ぶことであるとしている。1回生のうちから、なるべく保育現場を経験させることで‘夢見る保育者効力感’から脱して冷静に自己評価をさせる中で、

技能面も知識面も育てていかねばならない。また、2・3回生では実習経験での成功や失敗をきちんと捉え直し、その体験がどのように意識を変容させるのか個々に見ていかねばならない。その中で、実習後も学び続け、自身が重視する保育者としての資質や専門的実践能力を少しでもたくさん身につけて卒業後の進路に向かっていけるようサポートしたいと考える。

6. まとめ

本研究では、本学学生が保育者としての資質や専門的実践能力についてどのように考え、またどの程度それらの力を身につけているのかを明らかにすることで養成校としてすべきことは何かを再検討するため、学生の意識について調査を行った。保育者としての専門能力も資質も、いずれもそれを重視するか否かという自身の考えについてはほとんどの項目で1回生の方が高かった。いま自分がどれくらい実践できるか（身につけているか）という自己評価について、保育の実践的専門能力は1回生の方が高く、保育者の資質は2回生の方が高かった。1回生はまだ理想の保育という意識が高く、漠然とした自信もあるが、2回生については学習や実習を重ねる中で子どもに対する意識や責任感が備わってきた一方で、現実の自分について冷静な評価をしていると思われた。今後は、日常の学びや実習での学びを総合的に捉えて学生の成長につながるよう考えていかねばならない。

引用文献

- 1) 林悠子・森本美佐・東村知子(2012) 保育者養成校に求められる学生の資質について—保育現場へのアンケート調査より—。奈良文化女子短期大学紀要, 43: 127-134.
- 2) 森本美佐・林悠子・東村知子(2013) 新人保育者の早期離職に関する実態調査。奈良文化女子短期大学紀要, 44: 101-110.
- 3) 森本美佐・林悠子(2014) 保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と資質について。奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要, 45: 123-130.
- 4) 佐藤弘毅(2011) 短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究。文部科学省成果報告書。
- 5) 奥山順子・山名裕子(2006) 求められる保育者の専門性と大学における保育者養成—保育者志望学生の意識と養成教育の役割—。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 28: 119-132.
- 6) 中村多見(2006) 保育学生の保育観(1)—保育者効力感の発達—。高松大学紀要, 45: 197-206.
- 7) 谷川夏実(2010) 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容。保育学研究, 48, 2: 96-106.
- 8) 浜崎隆司・加藤孝士・寺園さおり・荒木美代子・岡本かおり(2008) 保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響—実習評価を媒介した因果モデルの検討—。鳴門教育大学紀要23: 121-127.
- 9) 中村勝美(2005) 保育学生の保育者像と保育者養成教育に関する一考察。佐賀短期大学紀要, 36: 139-146.
- 10) 後藤範子(2011) 4年制大学における保育士養成教育と資質能力向上に関する一考察。東京家政学院大学紀要, 51: 23-30.

